

平成 22 年 6 月 10 日現在

研究種目： 基盤研究(C)  
研究期間： 2007～2009  
課題番号： 19520537  
研究課題名(和文) 小学校英語教育で培われる英語力についての研究—国際的評価基準を用いて—  
研究課題名(英文) A Study to Investigate How Much English Japanese Children Can Learn in their English Education in a Japanese School—Evaluation using a Global Standard  
研究代表者 米田 佐紀子 (YONEDA SAKIKO)  
北陸学院大学・人間総合学部・幼児児童教育学科・教授  
研究者番号：70208768

## 研究成果の概要 (和文)：

小学校英語で培われる英語力について国際的標準テスト(ケンブリッジ英検)によって客観的データを得るという目的に沿って研究を行った。検証では6年生でCEFR Pre A1 レベルに到達する一方、長期的検証ではCEFR A1~B1 という学力差の拡大と技能では文章力が課題であると示された。世界が求める実用的な英語力は語彙・文型・論理的一貫性のある文章力であることから、日本の英語教育の質の改善が必要な事が分かった。一方、社会的要因・生活用語の影響も大きい事が示された。研究結果は世界的・長期的展望に立った小学校から大学までの英語教育制度の確立と教育内容の見直しの必要性を示唆している。

## 研究成果の概要 (英文)：

Studies were conducted to investigate how much English Japanese children can learn in their English education in a Japanese elementary school and after they graduate from elementary school. The University of Cambridge ESOL examinations, a global standard, were used for evaluation. Results of the Cambridge examinations showed the following: 1. Japanese elementary school children can achieve Pre A1 of the CEFR; 2. Secondary and tertiary school students' achievements were from A1 to B1 of the CEFR, which indicated there was a gap between high and low achievers that would grow bigger over time; 3. Most skills were labeled as "weak," but writing was the weakest. "Practical English" in the global setting requires appropriate vocabulary, grammar, and coherence in writing/speaking, on which Japanese education needs to put focus. At the same time, the research indicated that the results were affected by factors like language for daily use and national language policies. To improve the English ability of the people in Japan, where English is a foreign language, the government needs to establish a national educational system at the elementary school level with a long term and global point of view, as well as re-examine the goals and aims of its English education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：小学校英語、英語教育、第二言語習得、英語力の長期的調査、国際的評価、ヨーロッパ共通参照枠、ケンブリッジ英検、英語が使える日本人の育成

### 1. 研究開始当初の背景

本研究当初(2006～2007年)小学校英語が抱えていた課題は①成果についての客観的データ不足と②教育の質と機会の均等の欠如であった。

グローバル社会に太刀打ちできる日本人の英語力向上のために何らかの形で英語教育を行っていた小学校は全国の小学校の97%にのぼったが、指導のばらつきが問題となっていた。小学校英語教育の指導方法・評価の不明確さ、客観的成果のデータ不足がその背景にあった。

そこで、日本における小学校英語では、英語が外国語(EFL)である日本で、児童に「何を、どのように、どこまで教えることができるのか」を明確にすること、またグローバル社会で英語が使える日本人の育成という観点から英語力の客観的データをグローバルな視点で測ることが日本の英語教育に必要であると考え研究課題の設定を行った。

### 2. 研究の目的

小学校英語について意図的・計画的・組織的に積み上げ指導を行うことにより、小学校での6年間の英語教育の実績を6年生児童の英語力を四技能について国際的評価基準(テスト)により客観的に測定し、どこまで小学校で英語力をつけることができるかを、国際的視野と言語習得の観点から探ることである。加えて、将来英語を国際社会で使いこなす力に繋がるのかという観点から小学校英語卒業後の英語力についての長期的検証をすることである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究方法の特徴と意義

英語力検証に用いた方法はUniversity of Cambridge ESOL Examinationsによるケンブリッジ英検である。本英検を用いた理由は、グローバル社会で評価の高く国際社会での日本人英語力(英語教育)の成果と課題が明確に捉えられると考えたからである。またケンブリッジ英検はヨーロッパ共通参照枠(CEFR)と直結しており、一人の学習者(あるいは言語使用者)として子どもから大人までを捉え長期的に見て行くことが可能であり、小学校英語教育の意義を同じ尺度で中高大レベルまで見る事ができる。またCEFRのCan-Doの抽象性をケンブリッジ英検のレベル別語彙・文型リストや評価基準により補完できる。

本研究では、ケンブリッジ英検の他適宜TOEIC, STEP英検を使用した。意識調査では記述式アンケートによる小学校英語に対する意識調査、ケンブリッジ英検受験に関する意識調査を行った。加えてCEFRのCan-Doを用いた自己評価も行った。

#### (2) 具体的研究方法・目的・対象

①ケンブリッジ英検公式テストによる小学校6年生(合計58名)の英語力(四技能)の検証と世界平均点との比較。

②ケンブリッジ英検のサンプルテスト使用による小学校6年生(合計60名)の得意・苦手な文型・語彙・発音などの検証。また1年間でつけられる学力についての検証(小学校6年生22名)。

③記述式アンケートによるケンブリッジ英検受験についての小学校6年生(合計42名)の

感想調査。

④アンケートによる小学校6年生(21名)の英語力自己評価(CEFRのCan-Doを用いて)調査。

⑤ケンブリッジ英検による小学校英語を受けた中高大学生(合計45名)の英語力の長期的検証。

⑥金沢市内学校に通う中学生、高校生、大学生(合計約2150名)を対象とした記述式アンケートとTOEIC, STEP英検結果による小学校英語に対する長期的検証。

#### 4. 研究成果

##### (1) 世界的視点から見た日本人児童英語力検証

Cambridge ESOLのStartersという子ども用テストの結果では、本学児童は日本人平均点と得点パターンが似ており、リスニングがリーディング・ライティングおよびスピーキングより高かった。概ね本学児童結果を日本人児童全般の指標と捉えられる事が示された。

世界スタンダードと比較して本学児童6年生は、CEFRのPre A1レベルまでの力をつけることが示された。Pre A1レベルテストの世界受験者平均年齢が9歳台である一方、本学児童平均年齢は11歳台で年齢的には2年程度遅れている。

本学児童はリスニングで世界レベルに達している。英語母語話者と日本人教師のチームティーチングによる指導成果と言える。リーディング・ライティングが課題であると同時に、大きな個人差が課題となった。満点を取る児童から最低点を取る児童までがあり、対策を講じる必要性が示された。

一方、台湾は日本の平仮名と同じように小学校で漢字の読みがな「注音符号」を用い、アルファベット文字に不慣れであるにもかかわらず、ケンブリッジ英検の結果は四技能とも世界平均点同等かそれより高い。教育の成果であると同時に社会的要因が影響することを示している。一方、中国はリーディング・ライティングでは高いもののリスニングが低い。

言語距離の観点から英語との距離が近い国(フランス、イタリア、スペイン)と遠い国(中国、台湾、日本)との比較をしたところ、距離の近い国々の平均点は高く、言語距離の影響も示された。

Startersの結果から、日本人児童は言語距離、社会的要因、学習で使用する文字など英語学習するには逆風の中にいる事が明らかになった。

##### (2) 四技能の得意・不得意についての検証

得意な技能はリスニングで苦手はリーディング・ライティングである。フォニックスを指導に入れているものの、期待したほど高い成果は出なかった。

この検証でのキーワードは「生活用語」と「学習に使用する文字」と考える。つまり、*b*と*d*や*p*と*q*を誤って入れ替えても実生活で損をしたり困ったりしないので習得への「気づき」に繋がらない。これが習得に至らない理由と考えられる。

また、フォニックスでは、consonant digraphs(二文字子音)、vowel digraphs(二文字母音)など、文字の組み合わせで別の音を作るという英語のルールが躓きの原因となることが示された。

スピーキングについて、世界平均点と比較すると低く、アジアとの比較でも低い事が示された。これについては国民性なども含め今後検証が必要である。

##### (3) 言語的(文型や発音)得意・不得意分野についての検証

文型については、Startersの模擬試験では特に不得意分野は見られなかったが、授業内の面接練習では“What is your favorite subject?”に対して、“\*My favorite subject is I like English”や“How old are you?”に対して“\*It is 11 years old.”のような誤答が見られ、文のルールではなく、文型を塊として覚えている児童が多いことが示された。

語彙や形態(書記法)では明確な苦手傾向が見られた。日常生活用語やカタカナになっている語は習得が早く、trousersのような児童の興味や生活に馴染みがなく、そしてカタカナにもなっていない語は習得が難しい事が示された。

文章読解になると、内容より先に量に圧倒されてしまうことが示されたが、一定の文章量に慣れることで得点を上げられることが分かった。一方、ケンブリッジ英検ではスペルミスは減点対象なので、writingのところを

\**writeing* とまたは *write* するなど英語特有の書記法や形態の問題が日本人児童には難しい事が示された。

#### (4) 世界スタンダードによる検証から得られた新たな知見

これまでの日本には四技能を測る児童用英語検定試験がなかった。その点、ケンブリッジ英検では小学校段階から四技能について測定できる。

公式テストでは、日本人児童は世界的に見てスピーキングも劣ることが示されたが、児童による受験感想からは面接が楽しかったという意見があり、スピーキングテストが児童のやる気に繋がっている事が分かった。また、YLE の多角的出題方法が学習意欲に繋がると回答する感想もあり、教育現場への大きな示唆となった。

世界の公式テストの結果から、言語距離よりは社会的要因のほうが学習成果への影響が強いことが示された。台湾がその例である。学校の授業だけで世界平均点の力をつける事は限界があり、社会制度の確立というバックアップが効果に繋がる事が示された。

模擬テストからは、日本人児童にとって定着しにくい単語があること、多角的視点からの設問、一定の英語の文章量に慣れる事の重要性が示された。

CEFR の A1 の Can-Do を用いた自己評価調査では、児童が英語力に自信を持っていることが示されたと同時に、実際英語使用の場面がなく自己分析が正確にできていないことも示された。

現場で出来ることは、まず課題の共有を学校と保護者とし、補習や個人指導の実施、また英語科としては英語をツールとして感じる指導の工夫をすることが重要である。姉妹校との交流などもある場合、現在持っている物をより生かす工夫が必要である。

台湾のように制度面で英語を教科として明確に位置付け、明確な目標と到達について保護者・児童にフィードバックをすることが学力向上に繋がると考える。小学校英語の教員養成も急務である。

#### (5) 長期的検証：小学校卒業後の英語学習は、「グローバル社会で英語が使える日本人の育成」に繋がっているか

このテーマから以下の 3 つの研究を行った。

1 つ目の短大生約 250 名にアンケートを実施し、学生の小学校時代の英語教育が大学での英語力にどのように影響を与えるのか彼らの TOEIC 得点との相関から探った。結果では、遊び中心の教授法を受けた学生は小学校時代の英語教育は効果的ではなかったと感じており、TOEIC の点も四技能中心の教授法を受けた学生の得点よりも低かった。ここから小学校段階での四技能バランス良く指導する事が、将来の高い英語力に繋がる可能性が示された。

2 つ目の研究は、中等教育段階での英語学習に対する意識や英語力に小学校英語がどのような影響を与えるかを探るため、金沢市内の中高生約 1900 名にアンケートによる意識調査と学力調査 (STEP 英検結果を使用) を行った。ここから受験・教科など外的動機付けの要因が大きいことと、金沢市が小学校英語導入を制度として確立したことが社会全体に影響を与え、学力向上に繋がったことが示された。国として制度や教育体制を整えて行くことの重要性を示唆している。

3 つ目の研究は、北陸学院中高大生 (北陸学院小学校の卒業生) を対象にしたケンブリッジ英検 YLE (7歳~12歳用) と Main Suite (一般英語テスト) による英語力の長期的検証である。YLE では、小学校時の成績が中高でも続く傾向があること、中高になると成績上位者と成績下位者の差がますます大きくなる事、リスニングについて、中学生の間は高い傾向があるが高校で低くなる事が示された。一方、リーディング・ライティングは高校生が高かった。このことから授業内活動が点数に反映したか、受験者層による結果と考えられた。今後継続した検証が必要である。

一方、一般英語テスト (Main Suite) の Key English Test (KET) と Preliminary English Test (PET) では高校生・大学生はほとんどの受験者が四技能とも「弱い」と判定された。総合点では CEFR の A1 あるいは B1 レベルの認定証を受けた。最も低かった技能はライティングであった。ケンブリッジ英検では場面や相手に相応しい語彙・表現方法を使用し、かつ一貫性や伝えようとする意欲を求められている。持っている英語力を総合的に活用して適切に伝える力を今後つけて行かねばならない事を示していると考ええる。一方、国内・学内テストで STEP 英検準 1 級受験者程度である成

績上位者がPET不合格になった理由は、テスト形式に不慣れなせいとかケンブリッジ英検自体が大学受験に有利にならないためやる気が出なかったとも考えられ、世界スタンダードを用いる課題が浮かび上がった。

今回の結果からは、小学校英語学習がグローバル社会で英語が使える日本人の育成に繋がっているかという問いに明確な答えが出なかった。不慣れなテストである事、1度きりであること、受験者が少ない事、本学小学校卒業生全員を調査出来ているわけではない事、個人別観察からは伸びている者もいればそうでない者もいることから、今回のデータだけで結論を出す事は性急かつ危険である。

今回の成果はケンブリッジ英検という子どもから大人までを測れる世界スタンダードで長期的検証により世界での位置を確認できたこと、課題が明確になったことである。今後、他教科との関連や自己評価など多角的研究も取り入れて行く必要がある。

#### (6) 小・中・高・大など学校種別間の連携：グローバルな視野から今後英語教育現場は何を目標とし実践していくべきか

小学校卒業時の Starters で満点が取れても大人になって英語が使えなければ意味がない。今回の研究を通して、英語力向上を現在の日本でするには、「受験や就職に有利になる」という事が一番の動機付けの要因となっていることが分かった。一番の弱点は持っている語彙と文法能力で一定の文章量を作り相手に適切に伝える技能であることも示された。今回の検証により、書くことが話す事同様重要なコミュニケーションであることが示され、両方の能力とも日本人は弱い事が分かった。

CEFR やケンブリッジ英検は長期的視点で外国語（ここでは英語）学習を捉え、また学習者を包括的かつ多角的に捉えている点で英語教育に重要な示唆を与えている。一方、この尺度での測定が英語力を図ることが将来に役立つと力説しても、現在の日本では受験等の有利さが重要であることが分かった。

この研究から小中高大の連携の模索に関しても多くの示唆が得られた。中高の英語教育は日本の英語教育の確かな土台づくりの重要な時期である。「グローバルな視点」と「長期的視点」で捉えること、そしてそれを小中高大の教員が共有することが鍵である。まず世

界の中の日本の位置付け、目指す学力目標、そして生徒の希望進路を確認し、自分たちに適した方向性はどこにあるのか共通理解することが重要である。

本研究の課題は以下の通りである。

(1) ポートフォリオの利用など学習者をトータルに見る研究に欠けている。

(2) 特定の私立学校を中心とした研究であり、データ数および地域が限定されており一般化するにはより大きな地域・数のデータが必要である。

(3) 追跡調査を小学校卒業生全員に行う事、また継続的に行う事が必要だが難しい。

(4) ケンブリッジ英検自体の認知度が低く実施をする経済的、時間的、精神的課題が多い。

2011年の学習指導要領から始まる小学校外国語活動はあくまで「活動」として位置付けられており、他教科のような数値化した評価はない。制度として中途半端であり、保護者や学習者は自分の学習進度の把握ができず、学力向上に繋げる事は難しいと筆者は考える。

一方、小学校で英語をすればネイティブのようになるという一般通念もある。実際は課題が多く現状は逆風の中を突き進んでいるようなものである。英語が生活用語ではない事を認識し、課題と目標を共通理解する事が重要である。多くの生徒・教師がテストの点数でしか有益感が持てない状況を踏まえ、テスト内容を改良することでグローバル社会に通用する英語への啓蒙をするのも1つの手段であろう。日本人に高度な英語力をつける事が不利な条件であるかを知ると同時に、日本の事情など通用しないグローバル社会でのコミュニケーション能力(CEFRのB2、つまり、STEP英検1級以上)に到達しなくてはならないというジレンマの中で、日本の英語力をどうやって世界基準に近づけて行くべきが大きな課題である。長期的かつグローバルな視点に立って、小学校から大学までの英語教育制度を確立し教育内容の見直しをすることが急務である。

#### **5. 主な発表論文等**

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①米田 佐紀子、リンチ・ギャビン、ウッズ・クレイグ「金沢市内の中高生への意識調査と実用英語技能検定結果に基づく学力調査からみた小学校英語導入の意義と課題」『北陸学院大学 紀要』 第2号

pp. 94-103、2010年、査読なし

②Lynch, Gavin. (2009). A Comparison of Japan's Approach to Foreign Language Education with that of Other Island Nations. 『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部 研究紀要』 第1号 pp. 395-414、2009年、査読なし

③Yoneda, Sakiko, Lynch, Gavin, & Woods, Craig. (2009). The Immediate and Long-Term Efficacy of Teaching English in Elementary Schools in Japan. *Memoirs of Hokuriku Gakuin University and Hokuriku Gakuin Junior College. No. 1.* 『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部 研究紀要』 第1号 pp. 191-208、2009年、査読なし

④米田 佐紀子「英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み」『北陸学院短期大学紀要』第40号 pp. 65-82、2008年、査読なし

⑤Yoneda, Sakiko & Lynch, Gavin. How Much English Can Japanese Children Learn in their Six-Year English Education in a Japanese School? -Evaluation using the Cambridge Young Learners Test. *5th Asia TEFL International Conference 2007, Pre-Conference Proceedings* (CD-ROM) pp. 1-18. 2007年、査読有

〔学会発表〕(計5件)

①米田 佐紀子、遠藤 彩代「小学校英語教育は「英語が使える日本人の育成」に繋がるか—世界スタンダード(ケンブリッジ英検)を用いた長期的検証—」『第40回 中部地区英語教育学会 学会設立40年記念 石川大会』2010年6月27日(日) 石川県立大学

②Yoneda, Sakiko, Lynch, Gavin, and Woods, Craig. (2009). How English Ability Progresses after Primary School English Education in Japan. *Language Policy and Language Learning (LPLL) 2009* hosted by Irish Association for Applied Linguistics. 2009年6月18日、アイルランド、リムレック大学 (University of Limerick, Limerick, Ireland.)

③米田 佐紀子、リンチ・ギャビン、ウッズ・

クレイグ「小学校英語教育がもたらした中高生英語力への影響と課題—金沢市内中高生へのアンケート調査と実用英語技能検定結果に基づく研究—」『第39回中部地区英語教育学会静岡大会』2009年6月28日、常葉学園大学(静岡市)

④Yoneda, Sakiko, Lynch, Gavin, & Woods, Craig. What Fruit does Elementary School English Education in Japan Yield, Immediately and in the Long Term? *Association Internationale de Linguistique Appliquée (AILA 2008)* 2008年8月29日、ドイツ、デュイスブルグ・エッセン大学 (University Duisburg-Essen, Essen, Germany.)

⑤Yoneda, Sakiko & Lynch, Gavin. (2007). How Much English Can Japanese Children Learn in their Six-Year English Education in a Japanese School?—Evaluation using the Cambridge Young Learners Test. *5th Asia TEFL International Conference 2007*, 2007年6月8日、マレーシア、クアラルンプール、プトラワールドトレードセンター (Putra World Trade Centre, Kuala Lumpur, Malaysia)

〔講演〕

米田 佐紀子 (2009) 「児童期の英語教育で身につけられる力についての短期的・長期的検証—実践と研究—」金沢市小学校教育研究会英語部会 講演 教育プラザ富樫  
2009年2月5日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

米田 佐紀子 (YONEDA SAKIKO)  
北陸学院大学・人間総合学部・幼児児童教育学科・教授  
研究者番号：70208768

### (2) 研究分担者

リンチ・ギャビン (LYNCH GAVIN)  
北陸学院大学短期大学部・コミュニティ文化学科・講師  
研究者番号：90442144

交付年度平成20年度のウッズ・クレイグは平成21年度は研究協力者に移動

### (3) 研究協力者

ウッズ・クレイグ (WOODS CRAIG)  
モナシュ大学(オーストラリア)・大学院・学生